

「お布施」と聞くと、お寺や僧侶に渡す包みを連想する方が多いと思います。ですがこの「布施」は仏教の大切な教えであり、更に広い今日的な問題をも含んだ意味が有るのです。

道元禅師が著された『正法眼蔵』<sup>ほだいさつたししようほう</sup>「菩提薩埵四摂法」の巻では、菩薩として人々を導く方法の一つとしての「布施」を・・・

「すつるたからを しらぬ人に ほどこさんがごとし。」と示されています。

「フードバンク」という活動があります。お店で売れ残った食品を、賞味期限が迫っているからといって無駄に捨てたりせずに、必要とする人や団体に提供します。それはお互い無償で行われるものですから、出す人、受け取りに来た人を詮索したりしないことが大切です、この活動は布施に通じるものがあります。

とかく私たちは「何かをしてあげた」と思うことにこだわりがちですが、それは<sup>しゅうじやく</sup>執着 といって心が迷う元なのです。

同じ様に、「ただ見返りを求めず、自分が出来ることをするのである。」とも示されています。相手からの感謝やお礼を望んだりせずに、自分の力を分かち与えることです。その様な行いが大きな施しになることもあるのです。

自然災害の際に救援物資を送った経験のある方もいらっしゃるでしょう。その時

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

の気持ちは、物の大きさや数に拘<sup>かか</sup>わらず、また誰に届くのかも分からないものですが、真っ直ぐに相手に伝わった事でしょう。

最後にもう一つ、「はなを風にまかせ、鳥をときにまかすのも、布施の働きのあらわれである」という道元禅師のお示しがあります。これは見守りの布施ということでしょう。

もうすぐ五月、今や花の季節の盛りです。折角咲いた花が春風に揺れても、それは自然のなすまま、鳥が大きな鳴き声でさえずっていても、それは鳥が生きるため、見守ってあげるのも布施だと気付くことが、ご縁の世界の中で生かされている私たちには必要なことかも知れません。

こうして道元禅師のお示しから布施を学んでみますと、普段の身近な行いが、実は人生の修行であることがわかります。有り難いことです。

— 終 —